

# 「日本歴史災害事典」に評価 吉川弘文館が受賞

中小の学術、専門書出版社を顕彰する第28回梓会出版文化賞（出版梓会主催）は、吉川弘文館（東京）に決まった。同特別賞は弦書房（福岡市）と社会批評社（東京）の2社。第9回出版梓会新聞社学芸文化賞には、新曜社（東京）が選ばれた。

出版文化賞の選考は5人の識者が担当。吉川弘文館は、「日本歴史災害事典」の出版が高く評価された。選考委員の竹内薰さんによると、「学術的な価値が高く、社会的な意義も大きい」という印象を持ち、選考ではほとんど異議が出なかつたという。

特別賞では、弦書房が『日本の石炭産業遺産』の出版で「地方出版の鑑である」という評価を受け、社会批評社が『見捨てられた命を救え！』など福島第1原発事故を扱った本の出版が注目された。

## ■第28回梓会出版文化賞

一方、新聞社学芸文化賞の新曜社も、震災関連の書籍が評価の対象になった。

17日には、東京都新宿区の日本出版クラブ会館で授賞式が開かれ、吉川弘文館の前田求恭社長は「出版というものは人とのつながりが重要ということを痛感している。出版環境は不況と呼ばれて久しく、メディアの環境は激変しているが、今回の受賞を契機に、書物は文化、良書を読者へという思いを新たに、社員一同、精進してまいりたいと思います」と受賞を喜んだ。

竹内さんは講評で、「ものづくりなどを例にしても中小が力を失っていくと業界全体が力を失つてまずいことになる。中小の頑張っている出版社を表彰するこうした地道な活動は重要」と、中小出版社の意義を強調した。

## 株式会社 吉川弘文館 殿

同 特別賞（記念品・副賞式拾萬円）

## 株式会社 弦書房 殿

## 株式会社 社会批評社 殿

### 選考のことば

梓会出版文化賞の意義はなんだろうか。

いまさらという気がするが、私は選考委員を仰せつかつてまだ二年目ということもあり、選考会議の間じゅう、つらつらと存在意義に思いを巡らせていた（もちろん、ちゃんと討議にも参加しておりましたよ、念のため）。

日本には数え切れないほどの出版賞が存在するが、その多くは、ぶつちやけ、ヒット作を捻出した

り、特定の市町村を宣伝するための「装置」として機能しているだけだ。その点、梓会出版文化賞は、純粹な文化振興活動とみなすことができる。日本で最も古い出版社団体である梓会が、あえて作品ではなく、出版社の出版活動を表彰することには、やはり大きな意味がある。

さて、第二十八回梓会出版文化賞の選考会議は、十月十八日に、冷たい雨が降る中、東京の山の上ホテルで開かれた。五人の選考委員から第一次候補が提出されたが、社会批評社、七つ森書館、吉川弘文館、現代企画室、東京電機大学出版局の五社は、複数の委員から推された。また、各委員の第一候補（つまりイチオシ）としてあげられたのは、社会批評社、吉川弘文館、弦書房、七つ森書館、玉川大学出版部の五社であった。社会批評社、七つ森書館、吉川弘文館の三社は、重複推薦であり、なおかつ、イチオシということになる。これは確率の問題だが、八十四社からの応募があつたことを思えば、この三社の過去一年の出版活動が、客観的に見て、高い水準にあつたのだと解釈できる。

数時間にわたる議論の末、本賞は吉川弘文館に決まった。出版活動としては、特に『日本歴史災害事典』に選考委員の注目が集まつた。この事典は、東日本大震災より以前に企画・編集が進んでいたものだが、急速、震災関連の項目を加筆して出版されたという。私も個人的に、学術的な価値が高く、社会的な意義も大きいという印象をもつた。吉川弘文館への授賞は、ほぼ全委員に納得のいく結果だったようだ。選考会議のかなり早い時点から、本賞については、ほとんど異議が出ず、議論の大半は特別賞の二社を選ぶために費やされたからである。

例年どおり、特別賞は二社に出された。そのうち、社会批評社は（こう言つてはなんだが）、毎年、候補にあがる出版社ではない。しかし、今年は、『フクシマ・ゴーストタウン』、『見捨てられた命を救え！』などの福島第一原子力発電所の事故を扱った本が高く評価された。やはり、旬のテーマは選考委員の意識に強く訴えかけてくる。

もう一つの特別賞は福岡に本拠を置く弦書房に決まつた。この出版社は、いわば「ダークホース」であり、斎藤委員が「発掘」してきた。選考会議が進むうちに、『日本の石炭産業遺産』などの仕事に対し「地方出版の鑑である」というユニークな評価を受け、特別賞にふさわしいとされた。ある意味、梓会出版文化賞の精神に沿う受賞といえるだろう。

最後まで特別賞枠を争つた七つ森書館と梨の木舎について一言触れておきたい。七つ森書館は、原発事故関連およびエネルギー・環境問題に焦点をあてた出版活動をされており、特に長年、『原子力市民年鑑』を刊行し続けてきた活動が、原発事故後の今、意義を認められつた。梨の木舎は、従軍慰安婦問題を扱つた出版活動が注目されたが、委員の多くが「畠ちがい」のため判断が難しく、授賞にいたらなかつた。

以上、簡単に今年度の選考を振り返つてみた。「地道だが価値のある出版活動を表彰」する、梓会出版文化賞の意義が再確認されたように思う。応募各社に御礼申し上げるとともに、受賞各社にお祝い申し上げたい。

（竹内 薫）

二〇一二（平成二十四）年十一月一日

第二十八回 梓会出版文化賞 選考委員 五十嵐太郎・上野千鶴子・斎藤美奈子・外岡秀俊・竹内 薫  
第九回 出版梓会新聞社芸文化賞 選考会議社 朝日新聞社・毎日新聞社・読売新聞社・日本経済新聞社・産経新聞社・東京新聞（中日新聞東京本社）・共同通信社・時事通信社